

老いに励む、歌

梶木 剛

古稀、七十歳を迎えるに当って、心ときめかせた歌人がいた。佐藤佐太郎だ。

先師斎藤茂吉に七十歳以後の作はない。先師が与り知らぬ七十歳以後、未踏の境地を覗きみる気持で作歌が可能な七十歳台に踏み入るに、心ときめかない筈はなかった。佐藤佐太郎はそう書く。七十歳以後、四年間の作を纏めた歌集『星宿』の後記。

佐太郎は老いに励んだ。七十歳以後の老いに励んで、作歌をなした。老いに励む、歌、その展開、『星宿』はそれを収める。

来日の多からぬわが惜しむとき春無辺にて梅の花ちる
得喪のひとしきわれのひそけさや辛夷の花芽冬日に光る

瞠目すべき老いの歌である。先師斎藤茂吉の与り知らぬ未踏の境地の作がここにある。それは確かなことだ。そう言っている。前者は、昭和五十四年、七十歳の作、後者は昭和五十五年、七十一歳の作。佐藤佐太郎が亡くなるのは、昭和六

十二年七月、七十八歳であった。『星宿』の後続歌集として没後の『黄月』がある。

老いに励む、七十歳以後の老いの歌に励んだと言っても、佐藤佐太郎の場合は、右のように、七十八歳止まりであった。そんなものではない。それよりも遥かに、遥かに高齢、百歳までの老いに励んだ歌人がいた。土屋文明である。

土屋文明が百歳で亡くなるのは平成二年十二月、その年の「アララギ」六月号に△鉛筆の短かき心になづみつ老いの朝宵をしるさむとする▽が載っている。土屋文明は百歳の老いの朝宵をしるすことに励んでいた。百歳の老いに励んでいたのである。作は七月号になく、八月号に二首、九月号に一首、それが最後の作となった。

没後歌集「青南後集以後」は、昭和五十九年から平成二年の最終作品までを収める。九十四歳から百歳まで七年間の作である。そこに認められる、驚嘆すべき作。

ひらくなき百年の前に立つ如き或夜うつろなるしばしの

目覚

食細くなりつつ生きて霜の下の草の枯れゆく心をぞ知る

そうなのか、と思う外ない未踏の境地、そういうものかと一読にして納得する外ない名品、それがここにある。前者、昭和六十一年、九十六歳の作、後者、平成元年、九十九歳の作。

土屋文明が没してから十年経って、門下の小暮政次が亡くなった。平成十三年二月、九十三歳であった。その晩年、小暮政次は溢れるほどの作歌に従った。老いに励み、老いの歌を作ることに励んだ。最後、平成十年から平成十三年の亡くなるまでの作が没後歌集『雖冥集』に収められた。最晩年三年強で九百三十六首である。作歌が溢れている。九十歳台の老いの仕事として、それがある。何と老いに励んでいたことか。何と老いの歌を作ることに励んでいたことか。

みづからの自然を表現し難きを嘆きなされし左千夫先生
生の動揺の表現として考へよしかは知るとも吾は呆け果てて

両首とも、平成十二年、九十二歳の作である。伊藤左千夫は大正二年に五十歳で亡くなった。一首目、九十二歳の老いが、八十七年前、五十歳で亡くなった伊藤左千夫を追懐している。遠い昔、みづからの自然の表現し難いのを嘆いた左千

夫の嘆きは、今日、老いの自然の表現し難いのを嘆く、自分の嘆きに重なる。小暮政次は苦吟を重ねつつ、老いの歌に励んでいた。この一首はそのことを示す。

二首目、苦吟に苦吟を重ねつつ老いの歌に励んだ小暮政次の、到り着いた結論がここにある。「生の動揺の表現として考へよ」と。文芸、短歌は「生の動揺の表現」だ、ということになる。要するに△写生▽である。これを△写真▽と受け取るのは正しくない。老いに励み、老いの歌に励んで九十二歳の小暮政次が出した結論、それは△写生▽であった。

もう一人の土屋文明門下、清水房雄。こちらはなお現役で、今年八十九歳。昨板上板された最新歌集『獨孤意尚吟』を覗いていて、巻末近く次の作が目にとまった。

この集もて吾もいよいよ終末か守旧派最後の歌よみとし
て
演技無く装飾無き表出を旨とせし時代もすでに遥かなる過去

平成十五年、八十八歳の作である。内容的には老いのしよぼくれが歌われている。だが、意味的なしよぼくれとは裏腹に、調べはとっても元気がいい。張り詰めている。意味的にはしよぼくれているけれども、声調的には元気がいい。老いのしよぼくれを歌って元気のいい見本、それがここにある。「この集」が終末でありそうもない。

言葉が微笑むとき

春日真木子

あと戻りできぬ時間の姿にて月蝕の下水音流る

岡部桂一郎

夢すぎて悲喜すぎしとも言ひかぬるこの世重たき水流れをり

斎藤 史

水は移ろいやすいものである、人間もまた日々変化し、水と同じく年月はさかさまには流れない。老いは逃れ得ないこと、年をとるのは自然現象である。かつては、老衰、老醜、老残と、「老」のつく言葉は、くらしい印象が強かった。人生五〇年といわれてきたのが、人生八〇年と伸び、人生一〇〇年も夢ではない現在、老年のもつ意味や価値が違ってくる。老年は、「人類の新しい経験」の時期と言われ、先のネガティブな言葉に対し、老熟、老成と敬意を含む肯定的な言葉も生まれた。老年期とは、永年の経験を積み、熟達し、大成する時期として、大きく意味や価値が与えられてきている。暦年齢で老年と見るのは不本意だが、みずから老いと言われている歌人の老熟、老成ぶりを見てゆこう。

のなかに探し物は見当たらない。諦めて庭へ視点を移す。△つじ咲く庭△を見るのではなく、△庭の向う△を見てをり少時△で、文学的なゆたかさが生まれている。△向う△は、時空のひろさである。手文庫の狭いなかと、庭の向うのひろさが対照的である。物忘れなどから心が逸脱し、自由になった眼差しである。

年とるはおのが喜劇を見守れる一観客になりゆくことか

前 登志夫

うす汚く老いて世にあるさま哀れ硝子戸にうつる清水房

雄君

清水 房雄

背を丸め机によりてまどろめる人を見詰めて夕陽沈めり

岡部桂一郎

老人の硬ばってゆく身体の動き、白くなり薄くなる頭、筋ばってゆく筋肉、たるむ皺、これらのすべてを、若いときは滑稽に思うことがあった。まるで喜劇のようである。しかし老年となれば、自身が演劇のモデルのものになってしまふのである。一首目は、その喜劇を演じる自己を、一観客として見る。演じる行動は、見られる行動となる。この△私△との距離のおきかたは見事である。二首目、△うす汚く△△世にあるさま哀れ△、硝子戸に映るみずからの姿を、もう一人の吾が見つめているのである。結句の、△清水房雄君△が、この客観的態度を示している。さらには、△君△が、少年の

十方の細胞日々減ると言ふ物忘れ多く年暮れむとす

宮地 伸一

忘却のうれひ吾にあり今の今なに忘れしかも忘却したり

清水 房雄

せつばつまつたことなどなければもの忘れ人忘れして時には怒る

武川 忠一

手文庫の中に見当たらねばつじ咲く庭の向うを見てをり少時

森岡 貞香

人間誰しも脳細胞は、日々壊死している。老いればおとずれてくる物忘れも、自然体として受け入れるしかない。一首目、平静にさらりと詠んでいるが、△年暮れんとす△の含みは大きく、二首目の極端な物忘れの様が、△忘却△の気合のこもった表現で、年齢の超越を思わせる。一、二首共に自己肯定しながら自己否定があり、微妙な心情が見え隠れする面白さがある。三首目、△もの忘れ人忘れ△を、自然体として春の微風のように受け入れながらも、痛い経験にちがいない。△時には怒る△が、それを語っている。四首目、手文庫

延長として自己を感じているのではなからうか。「成熟するにつれて人はますます若くなる」というヘッセの「私は自分の少年時代の生活感情を心の底にずっと持ちつづけてきた」の言葉を思いおこす。三首目の、△背を丸め△まどろむのは作者である。沈む夕陽に見詰められるのは、他者としての自己自身である。老北と夕陽の逆転の発想が鮮やかである。三首いずれも、曇りない自己認識のありかたである。

熱狂のロックの席に白髪あてがつくりとするわれも白髪

岩田 正

白く長き眉毛一本切りますかと理髪師の真顔が鏡に映る

橋本 喜典

一首目はロックと白髪の取合せ。ロックン・ロールの熱狂的な身ぶりトリズムのなかでふと気付くと、スターにもファンにも白髪がいる。昔のコンサートでは、みんな恰好よかったのに、一様に中高年になったのだと△△がつくり△する作者の頭も、また△白髪△。ロックを通して時代を映す作品の妙。一首目は△△がつくり△、二首目は△真顔△、共に言葉の働きを思う。理髪師の真剣な問いに、改めて一本の△白く長き眉毛△が、命毛、または白毫へと思いが届き、読後の思いのひろがる作品である。

たとふれば梟のごと老いゆかん首をぐるりとまはして生

きん 小中 英之
 蠹虫が蠹をつづりてひそむこと蠹を欲する、われは老
 虫 宮 英子

梟、ミネルヴァの梟は知恵の象徴である。梟は、身体は静止したまま、首をまわして獲物をとる。病身の作者もまた、△首をぐるりとまはし△万象の動きにむかう気持がこもる作品である。二首目、蠹虫の蠹ごもりのように、静かに息長にありたいとの洒落な作品、蠹虫は蠹のなかにこもりながらも樹の枝の下がり四囲を見わたしている。たとえ身の動きは休止しても知的好奇心を失わぬことが老熟に繋がる大事である。

おぼろこぶとろりと深き舌ざわりする一椀 短歌のよ
 うな 武川 忠一
 女長寿の気はづかしさは 世の隅に古き餅の微など落す 斎藤 史

△おぼろこぶ△の△とろり△△深き舌ざわり△、やわらかい言葉の繋がりの間に微笑みを感じる。二首目の△古き餅の微△を落す動作は生真面目だが、ここにも微笑がただよう。屈折を超えた作者の精神活動の秘密がありそうだ。共に固有の魅力がある。

目葉のつめたき雫したたれば心に開く 萬浦むらさき

岡部桂一郎

「うつくしいものを見る能力を保っていれば人は老いぬもの」は、カフカの言葉である。青春時はうつくしいものを見て弾むが、年齢と共に感動が薄れてくる。老年ならずとも瀾落の始まるのはそんなときである。△目葉のつめたき雫△から、△萬浦むらさき△へと、感覚的にも言語的にも、こんなにもうつくしく展かれていく。冷たい一滴で、作者の内部にあたらしい眼が活気づいたのである。

このような想像力と言葉による異化の見られる作品の上に、老いの影はない。老いの日常を、いかに異化してゆくか、言葉のひらく世界に、私はいま眼をみひらいている。

以上、見てくるとどの作品からも匂い立つような微笑みを感じる。言葉自体は無表情なものであるが、作者により一行に組まれるとき、言葉の繋がりによって互いに響きあい、陰翳を生み、詩語として微笑みはじめる。これが老熟、老成である。肉体はたとえ衰えても、いたずらに落ち込み、悲慘に思うのではなく、現実を突き放し、客観視して微笑むのである。私と△私△との距離、現実と作品との疎隔は、若年も老年も表現の上において変りはないが、その距離の間に、作者の長い年月の経験を踏まえての個の魅力、個の知恵が滲むのである。微笑みを、自由、遊び、余裕と言いかえてもよい。

時には、その微笑みが怖くさえ見えることがある。微笑みの明るさのなかに、悲慘が語られているからである。

壮健日日

(明治40年生・地中海)

岩本 繁治

朝夕の食事はうましおのずから生きるよろこび溢れ来たれり

長寿の基なるゆうべの酒一合まぐろの刺身も娘ら添えくれぬ

壮健は努力の賜もの朝夕に腕立て伏せを六十回為せり

沈みゆく夕日荘厳な街の空はるかな浄土のひかり映れり

努力なおみのらず逝く人多くあり天命というを孔子も説きぬ

一匹の老犬小屋に住むがごとうごく世のさま見つつわれ居ぬ

百歳はわが人生の千里塚それへひたすら日々をはげめり

冬の涸れ井

(大正4年生・彩光)

有川美亀男

奥利根の櫛^{おな}の林に隠れ棲む山神は人に炭を焼かしむ

馬蹄型の冬山脈^{やまなみ}に囲まれし上毛^{かみつげ}の見ゆ県庁三十二階

霜夜の寒真^{かん}昼間の炎身^{えん}に込めてつひに無言の黒き庭石

補聴器はトラック・北かぜ・をみなの声・世に因果なる音をも集む

やむを得ずおのづからなる長きもの麒麟^{きりん}のうなじ女人^{にょにん}の電話

さりげなく砂雪^{しなせつちん}隠の伏せありき二十年のむかし不昧公の茶室

青春の無かりしわれは玄冬の涸れ井^かを持ってど奥の見えざる

特集八今日を拓く高齢者の歌V・歌人の老境

北原白秋

光をもとめて

吉野 昌夫

白秋は昭和十二年十一月腎臓病による眼底出血を患って薄明の生活となり、闘病五年、十七年十一月五十八歳で死去している。この間の作品は発病した所に始まる『黒櫓』と没後刊行された『牡丹の木』に収められている。

父と母はまだ存命中で白らの老いは八稚なさび坐す母聞けば身の老のたちまちいたり子はも泣かえつVと母の老いを案ずる折にたまたまわが身を振り返って気付く程度。老いを直接とりこんだ歌は『牡丹の木』に「八日光浴み為すなき時を樂しむはすべあるごとし我はも老いつVの一首を見るのみ。それとて哀しむより楽しんでる趣き。それより白秋は文学者の命とも言うべき情報の窓に視力を奪い去った病と闘わなければならなかった。

照る月の冷さだかなるあかり戸に眼は凝らしつつ盲ひてゆくなり

そして八ひと度は相見まつき縁なり日光菩薩加護あらせたまへVと病苦を救い無明の痼疾を癒すという日光菩薩の慈悲にすがりもするが、悲しみにうちひしがれて終る白秋ではなかった。『黒櫓』巻末に「この一生の重患に於て、他に補うてあまりある道の樂しみを得たことは、私の欣びである。私

は寧ろ現在の境涯に於て幸せられてゐる」とさえ記している。視力は失ったがこれまで惑わされてきた雑色^{ざしき}に目がゆかなくなつて、嘗ては見えなかった視界が内観によって開け、聴覚も昨日までとは違つた音律と階調を以てより高い境涯の空に響かせてくれる——というのである。

か勳業にしづみて匂ふ夏霞若かる我は見つつ観ざりき『黒櫓』という歌集名ともなつた庭の櫓を歌つた八黒き櫓の鎮靜にして現しけき、花をさまりて後にこそ観めVの次に置かれた歌だが、今迄ぼんやり見ていたがここに黒く立っている櫓の現前する実相は、辺りの煩わしい花等の終つた今だからこそ観てとれるのだなあとという感動。「若かる我」は病を知る前の健康だった自分共々ネガティブに、老いと病はポジティブに意識されている。ひとの厭う老いと病を逆手にとつてその先により高い境地を志す白秋であった。老いも病もその原動力に転化されている。肉眼で捉えられなくなつたものを耳で、肌で、気配で、こころで感じとり、蓄積された知識、記憶をよびおこしつつ新しい境地を拓いていった。

視力を確かめるように片手を見つめていてふつと昔見た能の所作(片手を眼にかざすのみ)が甦つて生れたと思われる片手のみ眼にさしかざし声は無し泣くなる姿ころには観よ

などは能の神髄と白らの嘆きをこころで活写している。死に臨んでの最後の言葉は「新生だ」の一語であった。白秋は最後まで光を求め絶望を拒否したのであった。

斎藤茂吉

活力をもたらす表現

常磐井猷麿

高齢になるにつれ、人は表情を失ってしまふ。表情のない人を見るのは辛い。何とかして表情を取り戻してあげたいと思う。表情を失うのは表現意欲を失うことだから、表現意欲が戻れば表情も出て来る筈だ。私の寺では大正十年から老人ホームを経営しているが、その中で私の念願しているのは老人文化の創造である。高齢社会となったからには老人が文化の担い手となり、浅薄な若者文化に代らねばならぬ。近年は施設でもユニット・ケアが重視されて来ているが、これは表現活動にも好都合で、短歌制作の場ともなり得るのである。

ところで、茂吉は「老い」をどう歌ったか。茂吉の老いの白覚は速く、昭和四年一月、四十八歳の詠に、

こぞの年あたりよりわが性欲は淡くなりつつ無くなるらしも
『たかはら』

と見えるあたりが最初のものであろう。老いを性欲の減退から感じ始めるのは、いかにも茂吉らしいではないか。

しかし、茂吉が積極的に老いを受容するのは、何と言っても終戦直後のこの歌からであろう。

あかがねの色になりたるはげあたまかくの如くに生きの

こりけり

『小園』

この一連は「残生」と題されているが、生き残ったのだから「生残」ともいうべく、この「はげあたま」が「老残」「敗残」の酸味苦味をまじえた満足感と、新生日本の明日への意欲とを見事に表現していると言える。「あかがねの色になりたる」も積極的で強い。

わがかしらおのづから禿げて居りしことさだかに然と知らず過ぎにき
『つきかげ』

後年このようにも。こういう恬淡（あるいはとげ振り）も老いの武器である。更に振い立たせるものは、孫の存在。現実には係うまれ米て乳を呑む直接にして最上の善

『つきかげ』

孫の歌はロクなものにならないから詠むべからず、とよく言われたが私は反対だ。味方として大いに詠むべしである。

欠伸すれば傍にゐる係真似す欠伸といふは善なりや悪か

『つきかげ』

更に異性への関心を失わず、歌の仲間をもつこと。

眼を閉ぢて貴妃をおもへば心たひらぎ雑沓電車にはこばれて行く
『つきかげ』

あつまりて歌をかたらふ楽しさはとく差しくる光のことし
『つきかげ』

最後に一つ、わびしさも堂々とありのままを歌うべし。

この體占くなりしばかりに靴穿きゆけばつまづくものを
『つきかげ』

特集／今日を拓く高齢者の歌／歌人の老境

窪田空穂

死のためならず生のためなり

馬場あき子

人が老いを意識するのは何歳ぐらいからだろう。子供が成人式を迎える頃、娘を嫁にやる頃、孫が育ちゆく日々、一つにはこうした身辺の人々の成熟により老いを自覚させられることが多い。また逆に、き人との距離や見つめ合ってきた親に老いを感じた年齢に自分が近づいた時などにもそれがある。

空穂の歌に「わが父の尊とかりしを三十に入りて知りそめ四十にして深し」（『鏡葉』）というのがある。四十歳ですでに父の人間的存在の深さにふれるということは、いわば父の老境を心に抱き取ることができていたということである。老いの準備を、人は他の老いを見つめ理解することではたしてき

さみしさの沁み出て溜まる思ひありこの快さよ老いて今知る
『郷愁』

これは還暦の頃のものだが、「さみしさの沁み出て溜まる」という独特の感覚の中に固有の老いが感じられる。この「さみしさ」が「快さ」と結びつくところに、まだ気力も体力も充分な「老」の白覚の位相もあるだろう。この歌とともに、空穂は「澄みくる心」や「心深きもの」をうたい、それが多

くの人生に立合い、世の中を見つめてきた「老」そのものの本質だと把握しているのだ。

空穂の七十七歳の時の歌に、「命一つ身にとどまりて天地のひろくさびしき中にも思す」（『丘陵地』）がある。ここにも空間性の深い「さびし」が登場するが、もう一つ注目すべきは「命」という逆らいがたい天寿のようなものが身内にあるかぎり、人間はその命の意志に従って生きるべきだと考えていることである。これは終生にわたり貫かれた生き方であった。「わがためは第一の物われはわが命に仕へかくも老いにし」（『老櫓の下』）という八十三歳の歌など、この「命」のちからに自ら敬虔な思いで仕えたという、ふしぎな作だといえる。

いはゆる最期の一念われにあり死のためならず生のためなり
『去年の雪』

昭和四十一年、空穂九十歳の夏の歌である。空穂はこの時上田市別所温泉に滞在していて、俄かに発病し、気管支炎に苦しんだ。本来、空穂は頑丈なたちではなく、老来いっそう不調を重ねながら長生きをした。肺炎・咯血・貧血等々のため老衰を深めつつ「死」を思うことも少なくなかったようだ。しかしこの一首には毅然として死と対決する気迫がある。「最期の一念」とは、死を享受する覚悟である。その覚悟を死ぬために覚悟するのでなく、生の究極において一切を天命に委ね、生きうる限りは与えられた生を全うするという、その立場から思う死なのである。もう一首引いておこう。「最後の息する時まで生きむかな生きたしと人は思ふべきなり」

宮 柊二

孤独をみつめる

川辺 古一

創刊して「コスモス」は二百号を迎え、出詠者も二千人を望むほどになった昭和四十四年、選歌は宮柊二ほか六、七人でやっていった。編集と校正は大森の守屋ビルで進められていたが、柊二は必ず出席して陣頭指揮をされた。その頃柊二はやうやくに老ゆる思ひす眠られず暗きあしたの雨聞きをれば

『独石馬』

を発表し、老いを自覚するに至っている。六十歳にはまだ数年を残しているが、糖尿病のため、東京新宿の朝日生命成人病研究所付属病院に入院された。私がお見舞に伺ったとき柊二は選歌や、多くの書籍を持ち込んで、病室はさながら書斎のようであった。私は受付の女性に「仕事のことで病院には来ないでください」と叱られたりした。

老いそめて酒杯を交すことも無けど秋の菊食ひ共に幸ふ
昭和四十五年、五十八歳の折の作。柊二の糖尿病の原因は飲酒の量が挙げられるが、柊二は命を重ねるごとにとてもしよいことを言われた。また、酒の勢ひで多くの仕事をこなしていたが、体によいことはなかった。それ故、周囲の人達は極力お酒の量を控えるよう忠告の役を兼ねたりしていた。この

作品の初二句にはそうした寂しさが宿っている。

まぎれなく體老いしや交々に手首の痛み肩の痛み眼の痛み来る

『忘凡亭の歌』

同じく昭和四十五年の作。私の机の前に大きな額が立てかけてあるが、その中に柊二の顔写真が二枚と、間島定義が編集会の折に画いた「宮柊二先生像」が入っている。それぞれひげを蓄えられた立派な顔であるが、間島定義のスケッチには昭和五十五年二月十六日と日付が入っている。柊二がひげをのばし始めてから六、七年あつと考えられる。手や肩は傷んできたが、それに反比例するように顔は尊者の風格をそなえるようになった。

老いてなほ訴へたきこと我にあり亡き父母の今宵おもはる
私は柊二のお母さんに数回、お会いしたことがあるが、物腰がやわらかく、私の心を包んでくださった。「老いてなほ」という柊二の気持がとてもよくわかる歌。

老いづきし故に言はねどまざまざと悲哀のこる兵の日の夢
柊二は幹部候補生にはならず一兵としての生を遂げたが、一度、そのお気持ちを聞いたことがある。しかし、今はさだかに覚えていない。

頭を垂れて孤独に部屋にひとりゐるあの年寄りには宮柊二なり

『緑金の森』

自分を徹底的に客観視した結果、すさまじい迫力が裡にこもっている。それは高齢者の鑑といふべきだろう。柊二の晩年の孤独が偲ばれてならない。

佐藤佐太郎

佐太郎の〈老い〉の境に少し触れながら 今西 幹一

端から私事に拘ることになるが、父の三十三歳までしか知らぬ私は、〈老い〉の範疇の実際を父方、母方の祖父に求めるしかなかった。中農までいかぬ伊勢の山間の自作農の父方と、商都浪速の商家の主であった母方、娯楽のない地域の通弊として博打に手を出し田畑を借金形として押さえられた父方と、一代にして財をなした母方と、気難しくとかく都会の嫁が気に入らず、戦火を避けて身を寄せた嫁とその子達に必ずしも寛大でなかった、むしろ過酷だった父方と、再び実娘の母を大阪へ戻し女手の商いながら自立を計らした母方と、何かと対照的な二人だった。近寄りたたい祖父だったが戦局の窮迫をそれなりに伝える新聞を小学生低学年の私が読むのを一心不乱に聞いた祖父、その祖父の死の電報に駆け付けすでに座棺に納められていた祖父の濃い眉が印象的になぜか骨肉の繋りの断たれていないことを知らされたものだった。そのとき高校生のぼくはなぜか啄木歌集を携えた往路復路であった。啄木の見よう見まねが私の作歌事始めであった。女子供の家庭を案じて毎夜泊まりに米、銭湯好きでいつもお供をして夜食のうどんの馳走され、にこやかな相好をし

か知らぬ慈祖父だったが、なぜか自分の乏しい歌には父方しか出て来ない。母方は社会人一年生の時に没したが、いづれも〈老い〉の範疇として見るには自分が若きに過ぎたと思う。従って〈老い〉の範疇は、書物、とりわけ文芸の世界に求め探ることになる。古希まであと二年、とうに〈老い〉の範疇に入るはずだが、なぜかあまり〈老い〉を意識せず、その範疇を必要としないのが実情である。研究上扱うときも多くの場合、その歌人の疾風怒濤時代、短歌史の形成に関わるのは概ね青壮年時代であるからである。一代を扱っていても正岡子規や長塚節は夭折者のうち、島木赤彦や伊藤左千夫の他界も高齢社会化した今日の短歌界や学界では駆け出しに近い年齢である。茂吉はこれからの課題であるので、研究上、死に至る人生の全道程を突き合ったのは佐藤佐太郎一人しかない。角川文庫版・第一次佐太郎歌集に接したのは高校生の時だから最初から〈老い〉の範疇を求めているのではない。歩道会員でもない私が遂刊の歌集を購読するうちに、『群丘』に始まる佐太郎の〈老い〉を参照して来たに過ぎない。その佐太郎は鷗外の「静かなる生」を仰ぎ、蘇東坡を「人生の師」とする。つまり佐太郎は〈老い〉の範疇を鷗外と蘇東坡に求めたわけだが、それは〈老い〉の人生を統合する術を獲ようとしたもので、志向する悠々ないし悠容の境は容易に達成されたものでない。不惑を四十路の孔子が大いに感った証と受け止める私は、佐太郎の内の泡立つ思いの所在を感じ、その志向と鷗藤を共有する今日このころである。

土屋文明

究極の老いの歌

小市巳世司

土屋文明に私が初めて接したのは昭和十二年春の四月であった。私が恰度二十歳、文明は四十六歳半。いつも思うのだが、その頃の文明さながらのポートレートがある。昭和十一年十一月改造社発行の自選歌集『放水路』の口絵写真がそれだ。芥川龍之介の言うブラッシュのような口髭はいかにも精神そのものだが、丸い眼鏡の奥のつぶら目は妙に人なつこい。むしろ老いの影など感じられない。

その文明が老いを意識し老いを歌に見せるようになったのは何時頃だろうか。大雑把に私の見たところでは、満州事変に始まった戦争が泥沼化して拡大、文明の周囲の若者が次々と出征、文明自身も戦火に焼け出されて疎開生活をするに至った時期、歌集で言えば『山下水』に始まると言っている。春の日に白鬚光る流螢一人柳の花を前にしやがんでるる相抱ける一人海に向き石をなぐ吾より四十米かなたの世界とここで初老という言葉があった、四十歳のことを言う。

文明はこの時すでに五十六歳だが、百歳まで現役として活動した文明にしてみれば、これらの作に見られる老いは、文字通り老いの入口であって、物の数ではないと言うべきか。一

特集／今日を拓く高齢者の歌／歌人の老境

斎藤 史

忘れていた／老い／

森 太市

斎藤史に／老い／など来ると思いもしなかった。初対面は敗戦の翌春、史三十七歳に二十七歳、そのまま延長線上を半世紀を超えて共に歩いてきたからだ。その過程に小さな起伏はあったが。

老い果てて盲母が語るは鬼語ならむわれの視えざるものに向ひて
我を生みしはこの鳥骸のごときものかさればよ生れしことに黙す
『涉りかゆかむ』

これは実の親娘のみに許される絶唱であり、盲母と夫の介護に明け暮れた修羅の日の悲愴歌で忘れられない一首である。

史に若し／老い／を意識させたとしたら、ヘルペスを病んだ時期からだろう。或る日「わたし、ヘルペスに罹かったみたいよ」と、然りげなく話しかけられた時ハッと息を呑んだ。私もヘルペスの痛みに苦しんだことがあった。が雑誌の仕事はつづけたので、少し甘くみられていたようだった。心配なのは後遺症であった。案じたように神経痛が遺り、鉛筆も持てない状態がつづいた。当然、肉体的な消耗も著しかった。

首目はこれだけ見ると、いかにも漂泊の哀れな疎開老人に見えるけれども、そしてそれは必ずしも誇張とは言えない、ほんとうの姿でもあるにせよ、実際は「言葉なきこの大地も明えてよ萌えなば我は山をも食はむ」の一首に集約されるような熱烈な生活の実践に裏打ちされたものであった。

二首目は旅先の熱海で病臥した時の作。戦争から解放された新しい時代に生きる若者を、自分より四十メートル先を行く世界の人間として、温く包み込んでいる。そこには単なる年長者の同情とは異質の人生経験の先達としての英知と自負が、つまり「息づきて水肥になふ吾が老を気づかふ娘等ただ吾を止む」の歌に見られるような苦しい実践がその裏づけとして、ここにもあったからに違いない。

戦地から帰った私は、これら『山下水』の歌を見て、大いに勇気づけられたのであった。むしろ『山下水』の実際の生活も見た。今から思い返してみると、当時の文明は相変らず壮健で別段老いたとも見えなかった。誰もが皆苦しい生活をしてきたからだろう。ただ、それにも拘らず、新しい時代の到来に誰もが新しい希望にかがやいていたのであった。

文明は長生きをしたので老いの歌を沢山作った。老いを嘆く痛ましい歌を。その痛ましい歌に私は勇気づけられて来た。生きる希望を与えられて来た。就中、一首挙げれば次の歌だ。命すぎ何をつくるはむこともなし皮をはぎ肉をすて骨をくだけよ
『青年後集以後』

平成元年九十九歳、究極の老いの歌。何たる無、何たる生命力。

激痛の二十四時間絶えまなき日を経てみれば指は動かぬ4B鉛筆に毛糸を巻きて書く文字の指たよりなき春彼岸雪リハビリに屈伸をする手の指は空を掴むかたちして繰返す『秋天瑠璃』に散見するヘルペスの後遺症に立ち向かう、意志の強さを髣髴させる歌。

するする夕開くだり見て居れば他人の老はなめらかに来る
明るい観察である。興味津津が見えかくれする。「私、何にでも興味があるのよ」と言いつづけたのが、老いても詩藻を潤らすことがなかったのだらう。『風翻翻』より

山国に住みて老いゆく身のほどや盛りみじかき信濃の杏
花
いつせいに朱の実を落す杏の樹 去年より老いて我は拾ふも

諸々の樹木が一斉にひらく華麗な信州の風土に融合させるところが作者の真骨頂であらう。

『魚歌』『朱天』を除けば、他の歌集のすべては、信州という風土（精神的風土も含め）の所産である。芸術性、文学性を云々いわないとすれば、晩年の歌に親しみをもち、現代短歌の最高を極めた人が、自然体で自由自在に、ことばを操作されているところが、たのしめる。それは、また／老い／の特権であるかも知れない。『風翻翻以後』より

いかなる晩年来ると思ひしが至りてみればごく当り前
九十歳の先は何歳でもいいやうなお天気の中花が咲くなり
老いて艶、諸嬢もほどほど、歌に厳しかった史が懐かしい。

高齢者の歌・一首鑑賞

時間に運ばれる身体に根づく心なり精神というものは、身体がやがて死に、身体の死により心も死ぬことを経験的に知っており、心は「もののあわれ」そのもの。大切なのは目的地ならず現に歩いている歩き方の持続。認識上の応和の無私に新しいものが加わり、「生」は「死」より先輩。ここに高齢者の輝かしい叡智があり、その歌を鑑賞していただいた。

寂かなる激ちのごとき流動を胸に保ちつつ七十路に入る

木俣 修

この歌は「歳旦正述心緒歌」の中にある。上句の比喩「寂かなる激ち」の流動を心に保ち、強い意志をもって七十路を志向する姿勢に、私はいたくうたれた。長い闘病、更に文学に研究に執し、心を激らせながら励む老境、それは「なほ老のゆめはさまよふ虫くひの写本の冬のひさしにほへば」と老の夢を持つ。他に「老の滄」残り火「老の榮しき」など書生の業が溢れている。後の詞によれば「あまり悲壯感など湧いてこない」とある。

(相原恵佐子)

「時と共に」たゆたふ命いや果ての境をつひの幻として 扇畑 忠雄

イタリアの或る画家が描いた「老婆」という画のなかにCOL TEMPO(時間と共に)の銘を発見しての作。画の寓意は辛辣かつ嚴肅であるが、人はみな斯く老いる、心して生きよと説いているらしい。だが、歌の方はもう少し明るく、不確かな人生の究極境にほのかな希望の幻を見ているところに救われる。年を積み、知恵深い人でなければこうは歌えないいふし銀のような一首「たゆたふ命」は万葉が出典。

(青田 伸夫)

一日中言葉なき身の淋しさよ君知り給え我も人の子 高橋 千ヨ

二〇〇三年度の要介護・要支援の高齢者の全国短歌大会「ふれあい短歌大会」(みやざき長寿社会推進機構主催)の六千八百首の応募の中から私が最優秀に選ばせてもらった作品である。高橋さんは東京の特別養護老人ホームで暮らす一〇二歳の方。自分の言葉は不自由になっても、耳は遠くなくても、いやそうだから一層温かい言葉がほしいという気持がこめられている。「我も人の子」のこの結句の訴えはすべての高齢者の願いである。

(伊藤 一彦)

教室に手を上げし時の表情のふとよみがへる半世紀を経て 宮地 伸一

この歌は自らの老いを嘆くといった種類の作品ではないが、五十年前を思い、若き教師であった日を思い、追憶の中に鮮明に浮ぶ生徒の面影を悲しんでいるものである。作者の第一歌集『町かげの沼』の昭和二十七年発表の作「秋草のゆらぐ峠に立ちどまる山いつかしく少年かなし」に照応して、雁部貞夫氏の弟、実氏の自死を悼む哀切の情が私の心を揺るがしてやまない。宮地氏の本領はこんな処にあり、尚期待を抱かせてくれるのだと思う。

(石井登喜夫)

さまざまの七十年すこし今は見る最もうつくしき汝を楳に 土屋 文明

九十三歳のテル子夫人を失ったの挽歌であり、限らない相聞の歌である。この時文明は九十一歳。『万葉集私注』『万葉集年表』の研究と執筆、作歌に励んできた七十年は、松本より上京する大正十三年の転職や、第二次大戦を挟み決して楽な年月ではなかった。それを常に理解し支えてくれ、今鎮まっている夫人を「最もうつくしき汝を楳に」と詠む。このみずみずしい究極の思いと、豊かな調べは言いようもなく、類型をみない一首だ。

(梅沢 竹子)

殺戮略奪破壊を必然の事として人類史ありそれが戦争なのだ 清水 房雄

戦争は嫌かと問われれば、嫌に決まっている。だが、△センソー、ハンターイVと言さえすれば、それで責任を果たしたような気である、実は、それがもっともあふないのではないか。この一首、「それが戦争なのだ」のフレーズは重い。かの戦争で、一度は死を覚悟した体験から来る苦渋が、重さを引き立たせる。他の作品でもしかり。達観なんてあるものか、と言えるのも、高齢者ゆえの凄さなのだ。米寿の作者に感服。

(大下 一真)

今朝もわれ行方さだめぬ徘徊症ひろひ物一つして帰り来ぬ 清水 房雄

亡くなった師匠の年齢(84歳)を境にして、上を高齢者と勝手に位置付けている。この作者の歌にはいつも「勢い」を感じる。現実としての老境を歌って、やや寂しい内容ではあるが、それも計算上の事で根幹は前向きで強か。ちゃんと収穫に繋げるところが嬉しい。何時の時代何時の世代でも、どのように環境を捉えどう歌うかの姿勢を確立するのが第一歩。老境を歌うそのリアルタイムの動きを注視したいお一人である。

(大山 敏夫)

大帝国大企業大結社ろくなこと無し大とつくもの
清水 房雄

一昔前、いや何昔か前、大きいことはいくつだという
コマーシャルがあった。そういう時代があった。もう少し
前には、大日本帝国という巨大錯誤の国家もあった。そし
て大企業の悪質な公害なども思い出される。さて大結社と
は。清水氏もその「大」に含まれていた時代もあったのだ。
必ずしも他者への批判ではなく、苦い思いもあるからこそ
の批判なのである。ずばりと言い放ったこの力強さは凄い。

(沖 ななも)

月日は流れわたしは残る 何を為し来し これ
から何を為すべき これからの我 加藤 克巳

満八十八歳を迎えた加藤克巳は「近代」から「個性」へ
とたゆみなき歩みのうち主宰誌を本年一月をもって廃刊と
した。その決然とした意志は近年刊行された歌集に凝縮さ
れている。この第十八歌集に収められた一首、「何」の問い
かけと「これから」の繰り返しは深い。老いは
誰の上にもひとしなみにやって来る。老モダニスト、老冒
険者の精神の高さと深さによって老いの歌は共感をもたら
す。

(萩本 清子)

七十五歳未成の思ひは少年に交らず羅馬の石道
ありく 島田 修二

外国旅行での見聞を、自我の悲古と重ね、石道をゆく男
に自己を見る。どの世界にあって人間は悲苦にまみれた
生きもの。少年期にひき戻された時、作者は悲しみの器と
なって羅馬を瞳目して佇つ。この一首は「短歌」平成十六
年一月号に「羅馬玄冬」上首の第七首目の作品で、掉尾の
「晩年のしづけく充ちて明日帰る日本おもへば涙ぐまし
も」で結ばれ、島田氏が古都羅馬を歩いたのは夜半である
ことが他の歌で知られる。

(小野興二郎)

若者へシルバースートを譲ろうよ高齢国を背負
うのだから 齊藤輝世拓

不器用が天性とこの作者は自らを述べて淡々としてこの
一首を詠まれました。ご自分が席を譲られることが大方の
老人には一般的であり、周囲もそうして下さっています
が、この作品の佳さは微笑ましく、見ている周囲にも明る
く、愉しく受取れる風景ではないでしょうか。高齢の方の
お歌として近頃にしては珍らしい温かい佳い一首だと思ひ
ます。

(川崎みや子)

庭樹々に声のみしつ々姿みえぬ雀も雨にこもれ
るならん 平野 宣紀

平成十三年五月六日、その生涯を終えた平野宣紀は享年
九十七歳であった。その前年の平成十二年十二月に「花實」
創刊六十周年記念号を刊行した数か月後のことであつた
けに、私も会員一同にとっては、まさに哀悼の極みであ
つた。この一首は「花實」の平成十年十一月号に発表され
た七百の中の巻頭歌であり、この号以降の出詠は絶える。
九十四歳の高齢にして、平明を旨とし、適正なる写真とベ
ースとした詠風に改めて深く感動する。

(神作 光一)

事もなげに老化現象と医者は云ふ避けられぬ道
を行き悩む吾 塩倉とみ代

本年九十八歳で鹿児島市に在住する義母の平成元年（一
九八九年）に発行した第一歌集「白き花」から抄出した一
首。作者は妻の実母で、私の義母に当る。「山茶花」に入会
し、昭和三十四年頃から安田尚義氏、上釜守善氏等から指
導を受け、現在も作歌を続けている。体調の違和感を感じ、
かかりつけの医師に受診した処、老化現象で心配いりませ
んという医師に安堵と、多少半信半疑も残る患者の気持が
よく出ている。同じ経験が私もある。

(木村 博夫)

コルホーズにて草を積みつつ教わりしロシアの
歌を今も口ずさむ 草間よしお

作者は太平洋戦争後、三年間シベリアに抑留、イルクーツ
ク収容所で労働に従事した。回想とはいえず、一連の中には、
「物言はず笑はずなりて雪あをくつつむ収容所に帰りて寝
ねき」など当時の思い出が生々しい。掲出歌は、牧歌的な生
活の中での現在詠である。感情は昇華され自ずから詩情と
なって流露したものだ。作者は八十歳。不穏な世界情勢の
中でのこうした作は、声張り上げて叫ぶ反戦思想よりも切
実で哀しい。（「新アララギ」四月号より。）

(倉林美千子)

眠りをよろこびとして支へとして生きゆかむか
な残る命を 小暮 政次

二〇〇一年二月に九十二歳で死去した小暮政次の最終歌
集「羅冥集」の巻末に置かれた一首であり、体力、生命力
の全てが衰え果てた末の、死の直前の心境表白である。長
い短歌歴史の中で、万葉集の山上憶良など、老の最後を詠
んだ短歌は、多く詠まれているが、この思いを「眠りをよ
ろこびとして支へとして」と、特に「よろこびとして」と
詠んだのはなかったのではないか。小暮は終命まで短歌の
心は衰えていなかったのである。

(古賀多三郎)

長女にて家族十人の飯盛るを歎きたりしか今独り食ふ
佐藤 志満

志満氏は大正二年生まれ。今年の誕生日には九十一歳になられる。総勢十人の大家族の長女、想像しただけで活気ある、そして食べる暇のない飯盛り役の姿が浮かんでくる。

晩年の独り暮らしの食卓にあの活気が蘇る。人は暮らしのある限り食卓に向かう。晩年の食卓とどう向き合うかは万人に大切な課題だ。独りの食卓を嘆きながらも淡々と暮らす姿がこの歌にはある。嘆きつつ嘆かないその淡々とした姿が尊い。角川「〇四年短歌年鑑」。(三枝 昂之)

友ひとりまたひとり世を去りゆきて流れ解散のやうなる別れ
寺松 滋文

死は老若問わず訪れるが、高齢になれば身近な人の死に会うことが多い。年齢の近い友人がひとりまた一人と世を去るのは寂しい。いずれ自分の番がくると思う切実な寂しさだ。一人また一人と死に別れるのを「流れ解散のやうな」という比喩が内容にピッタリで、実に上手い。昭和三十年代に盛んだったデモとその後の「流れ解散」あれはなんとなく寂しかった。懐かしい言葉を再生させ、あの時代を生きた人の心情の籠る老いの歌。(沢口 美美)

憎しみを餌食となして老いゆかん。然り憎しみの慎悲の夜又は
宮 英子

歌集『アラベスク』には老境を詠んだすぐれた歌が沢山ある。作者は現在八十七歳。中でもこの一首は、強い言葉をかさねて使いこなしているエネルギーとその気迫にまず驚かされる。ある年齢に達すると、歌はそれまでの生き方の集大成の様相もみせてくるが、体力、気力ともに充実していなければこのような歌は生まれにくい。老いへの挑戦とおもえる自信。生きる力の根源はこのようなところにも潜んでいるのだろうか。瞠目の一首。(関根 榮子)

たくらみごとは何ひとつとて甲斐なしと思ひおほせて九十二歳
額田島一二郎

平成五年一月、九十二歳でこの世を去った額田島一二郎の「九十二歳」と題する一連のなかの一首。たくらみごとは何ひとつとて甲斐なしと「思ひおほせて九十二歳」と言う実感は、九十二年を生きた末に到達した心境であり、命の重さである。白らの生を透して人は如何に生くるべきかを問いかけてくる。師の作品は最後まで老化せず先頭をゆく歌人としての矍鑠たる心意気と、端々しさを保ち続けた。額田島一二郎最晩年の絶唱である。(田村 三好)

わが享けん弔辞をみつから考へてゐたり雨降る夜いねがたく
田中子之吉

近刊の歌集『転生前後』の一首。膠原病の娘を抱える著者は、長く続いた酒販売業をやめ、女房よりも古くて長いつき合いの友人たちである結社「運河の会」を退いた。高齢となってからのことである。この著者には学ぶもの多しと、歌集を読んだのだが、最も印象に残ったのは、著者の不屈の精神である。その象徴として掲出の一首を上げる。けだし死後に捧げられる弔辞を考えた人はあろうが、歌で見るのは始めてである。(塩野崎 宏)

ともし灯に銀にかがやく白髪を賜物として老いを諾う
米倉 英子

夜に入って風呂あがりに鏡を見たのであろう。老と鏡との関係。電灯の下で白髪が目立つという上句の囁目は生活的でよく理解できる。鏡は若く美しくあろうとする行為と密接だが、白らの白髪をまのあたりにする。ところが負の部分としてではなく「かがやき」と受けとめたところに老いを知るひとりの心のあり方が出た。そして老いを「賜物」と肯定することで重層的な味わいを加えた。九〇歳を過ぎ、自然体で前向きな明るさが伺える。(島崎 榮二)

ティッシュの箱跨ぎ厨に立ちてゆくわが足いまだ衰へてゐず
内野 潤子

「長流」(二〇〇四・二)で、この歌を読み愉快になった。ティッシュの箱といふ、厨に立って行く動作といふありふれたことである。それが「箱跨ぎ」で生彩を帯びてくる。歌の姿から見える作者は、何気ないさまに和服を着こなしそだ。その人がティッシュの箱を跨ぐのだから面白い。そして「わが足いまだ衰へてゐず」と気負わず言ってしまう。その平常心の美しさ、強さに感動した。「今日を拓く」とは、こういうことだろう。(醍醐志万子)

ものの音絶えたる深きまひるまに一つの鉤を付けてをりたる
久方壽満子

まひるまのしいんとした空間に、作者と一つの鉤が在るだけで、多くの言葉と思ひを削り落とした光景は、あからさまに見えながら妖しくもこわい情景です。余分なことを何も語っていないたはずまいから、読む者は想像をひろげて写生の根源をさぐろうとします。一つの鉤で今をとどめようとするのか、或いは現身にむすび付けているのであるうか。高年の命への混沌が原初が含羞が決意が入り乱れて、読む身をめぐり感動を呼びます。(谷井美恵子)